仏教西漸

森本公誠（美術院講演会にて）

Ⅰ　マウリヤ王朝（前 317 頃～前 180 頃）とアショカ王(前 268～前 232)

1. アレクサンドロス大王によるガンダーラ征服（前 326 年）―ガンダーラはもとアケメネス朝ペルシャ帝国の属州
2. セレウコス朝とマウリヤ朝始祖チャンドラ=グプタとの和睦（前 303）――ヘレニズム世界とインド世界の交流
3. 第 3 代アショカ王（阿育王）による伝道使節派遣（前 256）――法勅碑文（アフガニスタン・パキスタン現存 7 基）：プラクリット－アラム語、ギリシャ－アラム語、ギリシャ語、アラム語⇒派遣先の 5 人のギリシャ人王名：

   アンティオコス 2 世(シリア・前 261～246)
   プトレマイオス 2 世(エジプト・前 285～247)
   アンティゴノス 2 世（マケドニア・前 276～239）
   アレクサンドロス 2 世（エペイロス・前 272～255）
   マガス（キレーネ・前 300 頃～250）

地母神像（ペシャワール近郊出土）

Ⅱ　バクトリア王国（ギリシャ系：前 225 頃～前 139）とその後裔

1. バクトリア王国の西北インド侵入
2. メナンドロス王(在位前 155～130)と仏教僧ナーガセーナとの対論（『ミリンダ王の問い』＝『那先比丘経』）
3. キリスト教神学者アレクサンドリアのクレメンス Klemens（150 頃～215 頃）の記述中：前 1 世紀にすでに仏教はバクトリアに広まっていた、との説あり。
   Σαμαναιοι（Samanaioi）、梵語 Śramana、同俗語形 Samana　沙門那、沙門
4. マウリヤ朝滅亡後の西北インドの混乱「五濁悪世」――救いを仏塔信仰に
5. 異民族の侵入に伴うイランの宗教・文化の流入

Ⅲ　パルティア帝国（安息：前 247～後 224）の宗教寛容政策（ヘレニズム文化の継承）

1. スリランカ年代記『マハーヴァンサ』の記述：ドゥタガマーニ王（在位前 101－前 77）大塔建立起工式に 諸国から多数の比丘参列――ラージャグリハ（王舎城）8 万、バラナシー2 万、コーサンビー3 万、パータリプトラ（華氏城）16 万、カシミ

ール 28 万、パルティア（Pallavabhogga）46 万、ギリシャ人の国アレクサンドリア 3 万

2．安世高（もと安息国皇太子、位を捨て出家、147 年頃洛陽に来て帰化、20 数年間訳経に従事）

3．安玄（安息出身の商人、後漢の霊帝(在位 168～189)の末に洛陽に来て、優婆塞として過ごすが、やがて漢語に慣れると『法鏡経』を訳す）

Ⅳ　クシャーン朝（貴霜：1 世紀半ば～3 世紀前半）

1．インド・イラン・ギリシャ・中央アジアの各系諸民族の混住

2．東西通商による経済的繁栄

3．カニシカ王(78 または 144 年即位)によるバクトリア語（ギリシャ文字イラン語）の公用語化

4．大乗仏教の隆盛（仏塔信仰から大乗経典信仰へ）

5．仏像の誕生（ガンダーラ様式とマトゥラー様式）

仏頭（カッダム・ストゥーパ出土？）

Ⅴ ササン朝ペルシャ帝国（224～651）

1．ワラフラン（ﾊﾞﾌﾗｰﾑ）2 世（276～293）治下、大祭司キルデールによるゾロアスター教の国教化：聖像破壊と拝火神殿の建設――マニの処刑、マニ教・ユダヤ教・キリスト教・仏教などすべての異教の禁止、異教徒の東北イランへの追放：キルデールの碑文「大打撃と大損害がアフリマン（魔王）とデーウ（悪神）のもとにもたらされ、アフリマンやデーウの教義はこの地からなくなって、もはや信じられていない。そしてユダヤ教徒も仏教徒もバラモンも、アラム語とギリシャ語を話すキリスト教徒や洗礼派も、マニ教徒も、この地では攻撃されたのである。」

2．ササン朝によるクシャーン朝併合（3 世紀前半：副王による間接統治）――旧バクトリア王国領（クシャノ・ササン朝）における宗教寛容政策

3．バクトリア語仏教祈祷文書（5 世紀、サミンガーン？・北アフガニスタン発見）――namō lōgo-aspharo-razo boddo （南謨世自在王仏）、namō sakomano boddo

（南謨釈迦牟尼仏）、namō lōgo-apharo bōdosatpho（南謨観自在菩薩）、namō mētrago bōdosatpho（南謨弥勒菩薩）ほか

バクトリア語仏教祈祷文書（北アフガニスタン発見）

Ⅵ　ゾロアスター教と大乗仏教の対応関係

1．弥勒菩薩が仏滅後 56 億 7000 万年（最新説 5 億 7600 万年）に弥勒如来として出現＝サオシュヤントが最後の審判の日に出現して未来の世界、新しい不滅の世界を造る。

2．三尊仏（仏と菩薩：釈迦仏と弥勒・観音菩薩、毘盧遮那仏と文殊・普賢菩薩、阿弥陀仏と観音・勢至菩薩――ガンダーラで 30 例、ただし阿弥陀三尊は 1 例）＝主神アフラ=マズダと六陪神アムシャ=スプンタ

3．ゾロアスターは人間の苦しみを政治的現実的に捉らえ、神の救済を説く＝仏陀は苦を内面的哲学的に捉らえるも、大乗仏教で衆生の救済者としての菩薩が誕生する――龍樹（150～250 頃）『大智度論』「観世音菩薩等従他方佛土」

4．無量光仏＝フワルナフ思想：光輝く燃灯仏、ビルシャナ仏、阿弥陀仏（原始仏教

には光の仏の観念なしとされる）

Ⅶ　「仏陀伝」の西漸

1.イブン=アンナディーム Ibn al-Nadīm（988 年稿了）『〔書籍〕目録』所載インド関連文献のうちのアラビア語仏教文献：

*『浮図経』Kitāb al-Budd

*『菩薩とビラウハルの伝記』Kitāb Būdāsaf wa-Bilawhar

*『菩薩伝』Kitāb Būdāsaf mufrad

*アーバーン・アッラヒーク『ビラウハルと菩薩の伝記（詩文）』Kitāb Bilawhar wa-Būdāsaf

2．現存イスマイール派版『ビラウハルと菩薩の伝記』：ゴータマ=ブッダ伝の翻案

3．「仏陀伝」訳本の伝播：サンスクリットもしくはプラクリット→ソグド語、マニ文字ペルシャ語、中世ペルシャ語、アラビア語、グルジア語（Būdāsaf 菩薩→Yūdāsaf→Iodasaph→キリスト教聖者伝へ）、ギリシャ語(Ioasaph)、ラテン語(Josaphat)、ヨーロッパ諸語（カスティラ語を含む）、タガログ語、日本語———アントワーヌ・ドゥ・ボルジャ Antoine de Borja（ジェスイット派修道僧　1662～1711）訳天草版「さんばるらあん と さんじょざはつ の御作業」『聖徒の御作業のうち抜き書』1609 年刊。

エローラ仏教窟